




実の親子が子作りをする新興宗教の狂気

教祖の母と交わす背徳の契り





ここに来るのは何年ぶりだろうか。
外国人が見たら歴史的な日本の文化財だとしても
勘違いするような壮大な施設。
だけでも、それが間違いであることを僕は人よ
りも詳しく知っている。

何故ならここは僕が生まれ育った場所だからに
他ならない。
懐かしさや安らぎを覚えるような故郷とは程遠
い感情を持っているけれど。

この施設と運営する教団を創設したのは僕の実
の祖父である神原滋慶だ。
代々、小さな神社の神主だった祖父はある日、
突然に自分の中に神が居ると言い出した。
巧みで人の不安に付け込むような祖父の弁舌は
人々を惑わせ信者を増やしていった。

日ノ本を統べる神はここにおわす。
我が身のうちに宿りし神に従うべし。
破滅と不幸よりそなたらを救済し、
幸福への光明を与えてしんぜよう。




はじめは何を言っているのだろうか、病院に連れて行こうか、なんて僕たち家族はのんびり考えていたけれど・・・日に日に信者が集まり、彼らからのお布施で教団は大きくなっていった。



そして、それにより祖父の熱も高まっていき、ヤバイと本気で思い始めたころには全てがもう遅かった。

僕たち家族も教祖の身内として崇められるようになり、僕たちはそれに恐怖していた。




もう、おじいちゃんは・・・この家は
元には戻らないわ。逃げて・・・
あなた達だけは・・・普通の人生を
送って欲しいの。お願い・・・。


母様は自分の父親である祖父と完全に決別することは出来ず自分が犠牲になることで、幼い僕と父を逃がしてくれた。

それ以来、連絡すら取ることが出来ず一人残った母様を心のどこかで案じながら十数年ずっと生きてきた。
それが先週突然……





神原慶太さんですね？
探しましたよお・・・
光神陽明会の者ですが・・・

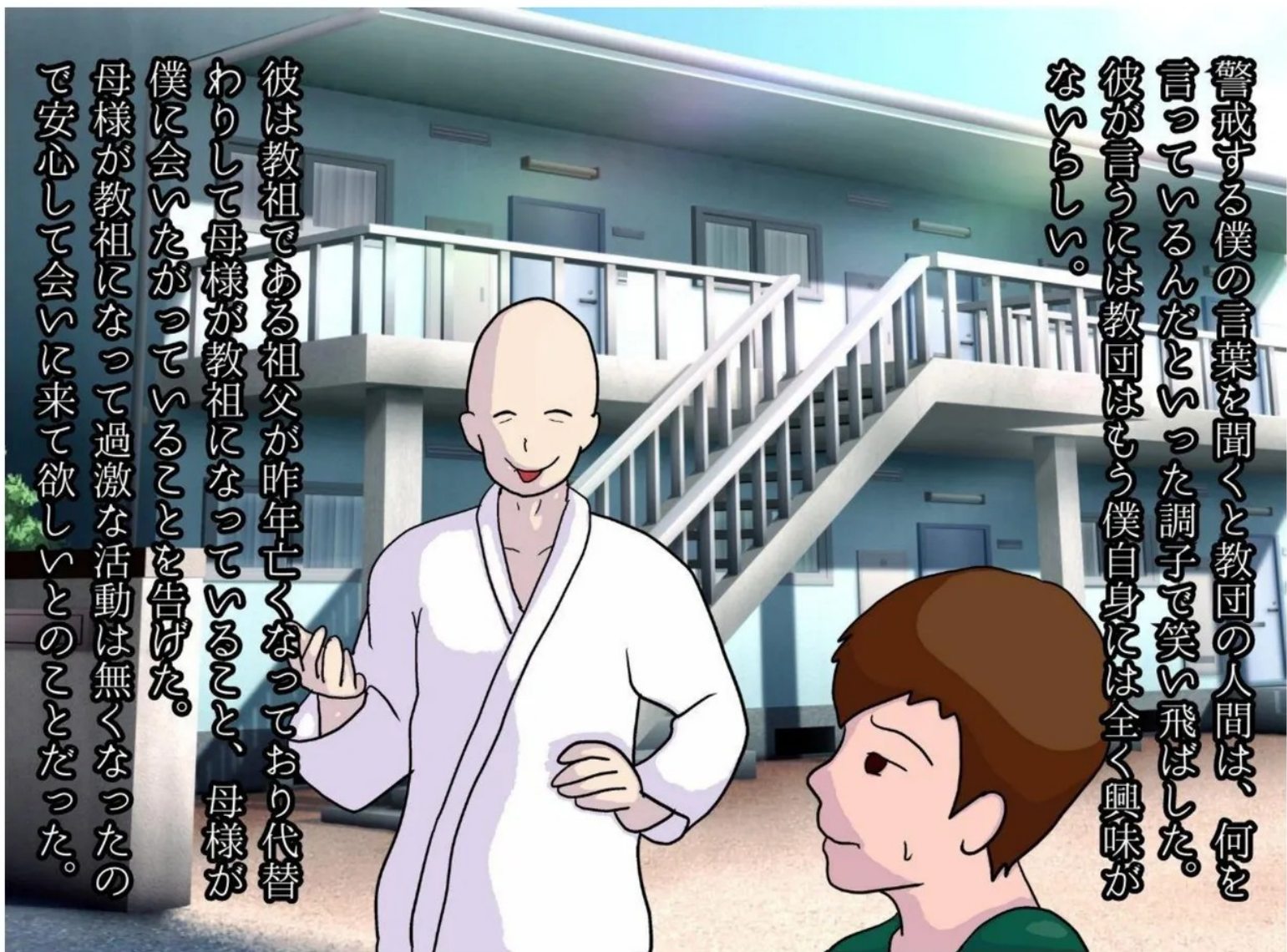
A young man with short brown hair and a green t-shirt is shown from the chest up. He has a thoughtful or slightly nervous expression, with a small sweat drop on his forehead. He is standing outdoors in front of a modern building with large windows. The sky is bright blue with some light clouds. Two speech bubbles are positioned around him, one on the left and one on the right.

ああ・・・は、はいっ・・・
あのっ、僕・・・教団には
関わりたくないんです。

祖父の言ってることもよく
分からなかったですし、
興味も無いんです・・・

警戒する僕の言葉を聞くと教団の人間は、何を言っているんだといった調子で笑い飛ばした。彼が言うには教団はもう僕自身には全く興味がないらしい。

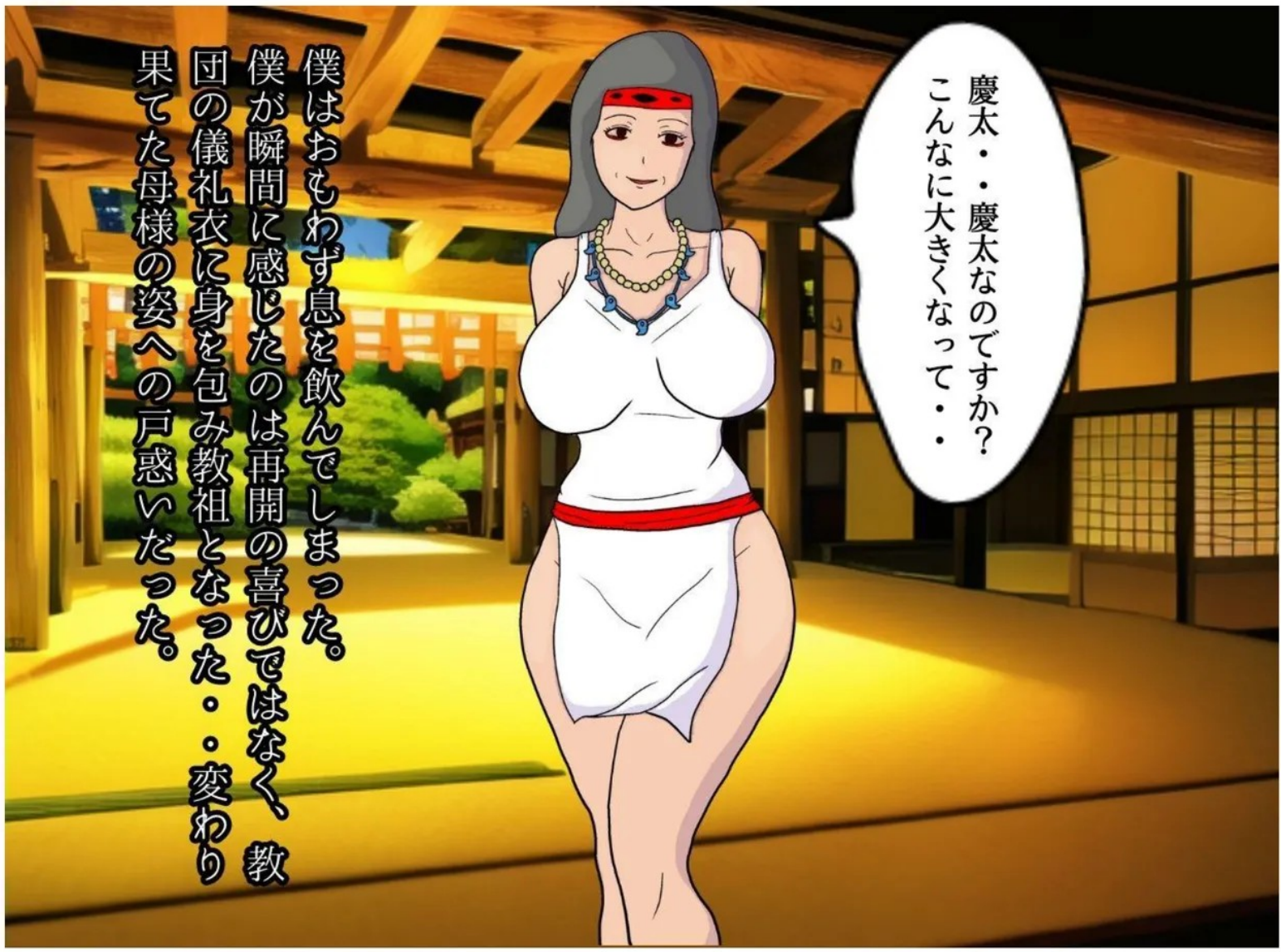
彼は教祖である祖父が昨年亡くなっており代替わりして母様が教祖になっていること、母様が僕に会いたがっていることを告げた。母様が教祖になって過激な活動は無くなったので安心して会いに来て欲しいとのことだった。



彼の言葉を鵜呑みにすることは出来なかったけど・・僕のために犠牲になった母様の現在が心配だったのも事実だ。
だから、迷いながらも僕はこの忌まわしい場所を再び訪れることにしたのだ。


いやあ、よく来てくれました。
巫女神さまもお喜びになられる
ことでしょう。さ、こちらへ。





慶太・慶太なのですか？
こんなに大きくなって・・・

僕はおもわず息を飲んでしまった。
僕が瞬間に感じたのは再開の喜びではなく、教
団の儀礼衣に身を包み教祖となった・・・変わり
果てた母様の姿への戸惑いだった。




か、母様・・・？
母様ですか？

そ、その恰好・・・
教祖になったって聞いて、
僕、僕は・・・

ふっ、ふっふっふっふっ♪
心配しなくて良いのですよ。
似合っていないでしょう？

私は私。あなたの母のまま
ですよ。あなたを送り出した
時のままの。





そ、そっか。そうだよね。
母様は母様のまま。
僕、心配してたんだよ…

私もですよ。さあ、疲れた
でしょう？今日はゆっくり
休んで明日沢山お話ししまし
しょう。今までのこと。

母様の言葉に胸を撫で下ろしたのも束の間のことだった。
翌日になり、久しぶりに教団の儀礼の様子を覗き見たことで僕の不安と不信は一気に加速してしまっただのだ。
僕が見た光景とは……




ああああ、来るう来るう
来ておるぞおおく・・・
破滅の音があ、暗闇の足音
が聞こえるのじゃあく・・・



だが、安心せい。わが父の
御霊が申しておるのじゃく
救いもまたすぐそこまで
来ておるとなあ






父が・・・神たる父が・・・
みなを救うために再臨せん
としておる・・・

神の血を受けた神の器たる
父の新しい現世の肉体は・・・
もう間もなくこの世に現れ
ると啓示が出ておるう



おお・・・
巫女神さまのなんと
神々しいこと・・・


ああ、巫女神さま
のお告げを信じて
いれば幸せになれ
るわね・・・




母様・・・大丈夫なの？
お、俺が居た時よりも
なんだか過激になっ
てる気がするんだけど・・・

ごめんなさいね・・・
あのようなところを見せて
しまって・・・

仕方が無いのです。教祖を亡くし
暴走しそうな信者の方々を抑えて
おくためには・・・あのような芝居
を打つ以外に私には何も・・・




母様・・・母様は今でもこんなに
辛い思いをしながら生きていた
んだね・・・それも知らずに・・・
僕は・・・僕はっ

A woman with long grey hair, wearing a white bathrobe, is shown in a traditional Japanese setting. She is smiling slightly and looking towards the viewer. The background features a window with a view of a garden with pink cherry blossoms and greenery. Two speech bubbles are present: one on the left and one on the right.

いいですよ・・・。
慶太が、あなたが普通の
暮らしをしていることが
母の望みだったのですから。

さあ、暗い話は止めて一緒に
お風呂でも入りましょう。
ここのお風呂は薬湯なのですよ。
元気が出るはずですよ。

A woman with long grey hair is standing in a bathhouse. She is nude, with her arms crossed and one hand behind her head. The background shows a traditional Japanese building with a thatched roof and a view of a river or lake at night.


私の中の慶太はずっと小さい
子のままだったけれど・・・
なにもかも大人になったのですね。

ここのお風呂に入れている薬草は
自分が解放されて心のままに行動
できる効能があるの・・・思い出話
もそのせいかしらね・・・

お風呂に入ってから何かがおかしい。
頭がぼーっとして自分の中から正常な判断力
が失われていくのを感じる。。。


自分が解放されて・・・
心の・・・ままに・・・？






慶太・・・？
大丈夫ですか？
ぼーっとして・・・

なんだろう・・・言ひ様のない衝動が自分の中に湧き上がっている。
母様に対する慕情とは違う愛おしい気持ちが溢れてくるようで・・・母様の白い肌が目釘付けになって離せない。




のぼせたみたいですね。
さあ、もうそろそろ、
上がりましょう。

その一瞬・・立ち上がった母様の大事な部分が
僕の目に映った。
益々自意識が朦朧として僕は母様に手を引かれ
るまま、浴場を後にした。

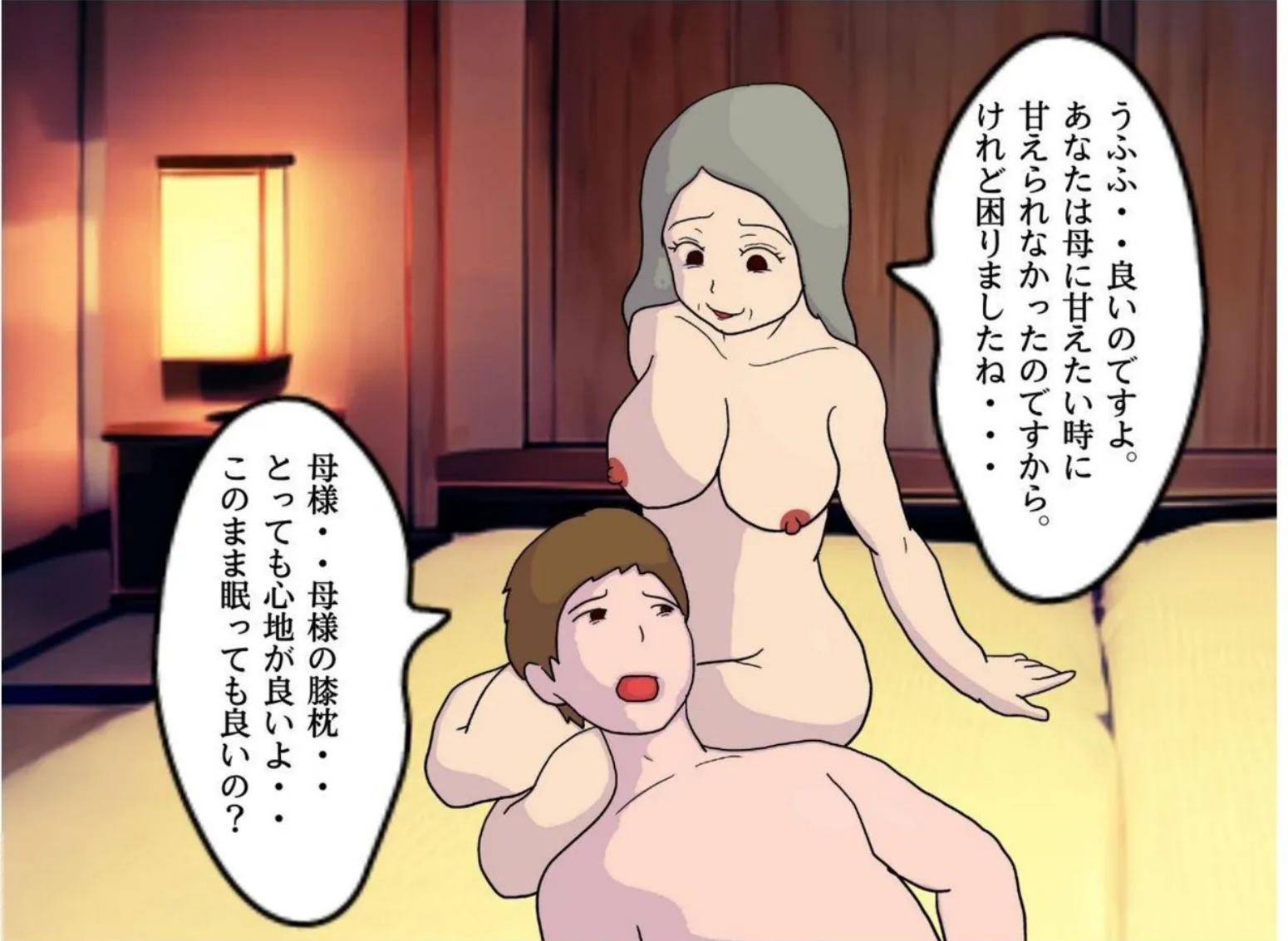


母様・・・ここは？
僕が止まっている部屋じゃ
ないみたいだけど・・・




ここは母の寝室ですよ。
あなた、とても体調が悪い
みたいですから・・・

今日は私と床を共にして
休みましょう・・・。




うふふ・・良いですよ。
あなたは母に甘えたい時に
甘えられなかったのですから。
けれど困りましたね・・・

母様・・母様の膝枕・・
とっても心地が良いよ・・
このまま眠っても良いの？




あっ・・・あああつ、
母様っ、ち、違うんだっ
な、なんで？勝手にっ！

こんなに御柱を大きく
膨らませていて・・・
眠れなるのですか？




うううっ、あああっ、母様っ
だ、駄目だよっ、母様の綺麗
な手で僕のそんなところっ

うふふっ・・・何が違うのです？
いいのです、今夜は正直になれる
はずですよ。私に・・・この母に
欲情しているでしょう？




慶太・・・素敵な御柱ね・・・
これを突き立てられたなら・・・
母は母で居られなくなるやも
知れませんが・・・ふふふっ・・・


A woman with long grey hair is shown from the chest up, hugging a man from behind. The man's head and shoulders are visible in the foreground, with his hair being dark brown. The woman has a gentle smile and her eyes are closed. The background is a simple room with a bed and a wall.

あああつ、嬉しいっ・・・
肉親の私を女として、雌として
求めてくれているのですね

わあああつ、母様っ
母様っ、僕我慢できないっ
母様と・・・母様とっ！



あああつ、そ、そこはっ・・・
慶太を産んだ淫門なのですよ？
母の淫門に口づけをするなんて
なんて素敵なことでしょう・・・




あなたが身の内の欲望を晒し
こんなにも母を求めてくれて
いるのです・・・私も・・・
正直にならねばなりませんね。

私はあなたとこうなる為に・・・
あなたをここに呼んだのです。
私ももう限界・・・逃げたいのです。
こんなところから。その為に・・・

私がここから出るために・・・新たな神を彼らに
与えてやらねばなりません。
私たちが一族の神たる血を色濃く引き継いだ新し
い神が必要なのです・・・

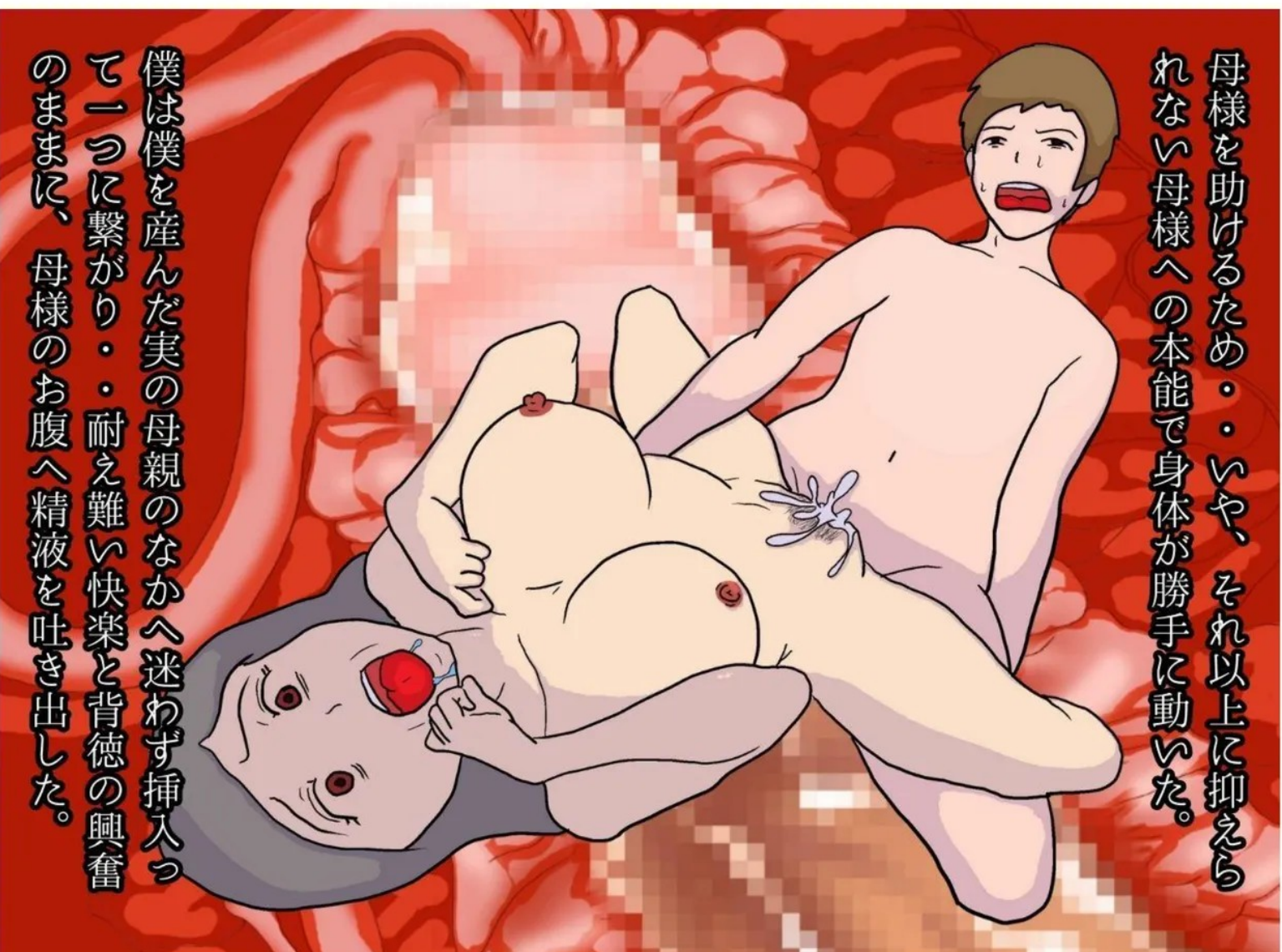


慶太・・・わが父の、教祖の血を継いだ私とあ
なたでそれを作るのですよ・・・
私とあなたの子ならば皆が納得して崇め奉るで
しょう。親子で交わって出来た・・・その子を。



さあっ、母に抱いているその
淫らで異常なその欲望を・
その立派な御柱をっ！
この母に突き立てるのです！
母の中へ還ってくるのですっ！

母様を助けるため・・・いや、それ以上に抑えられない母様への本能で身体が勝手に動いた。



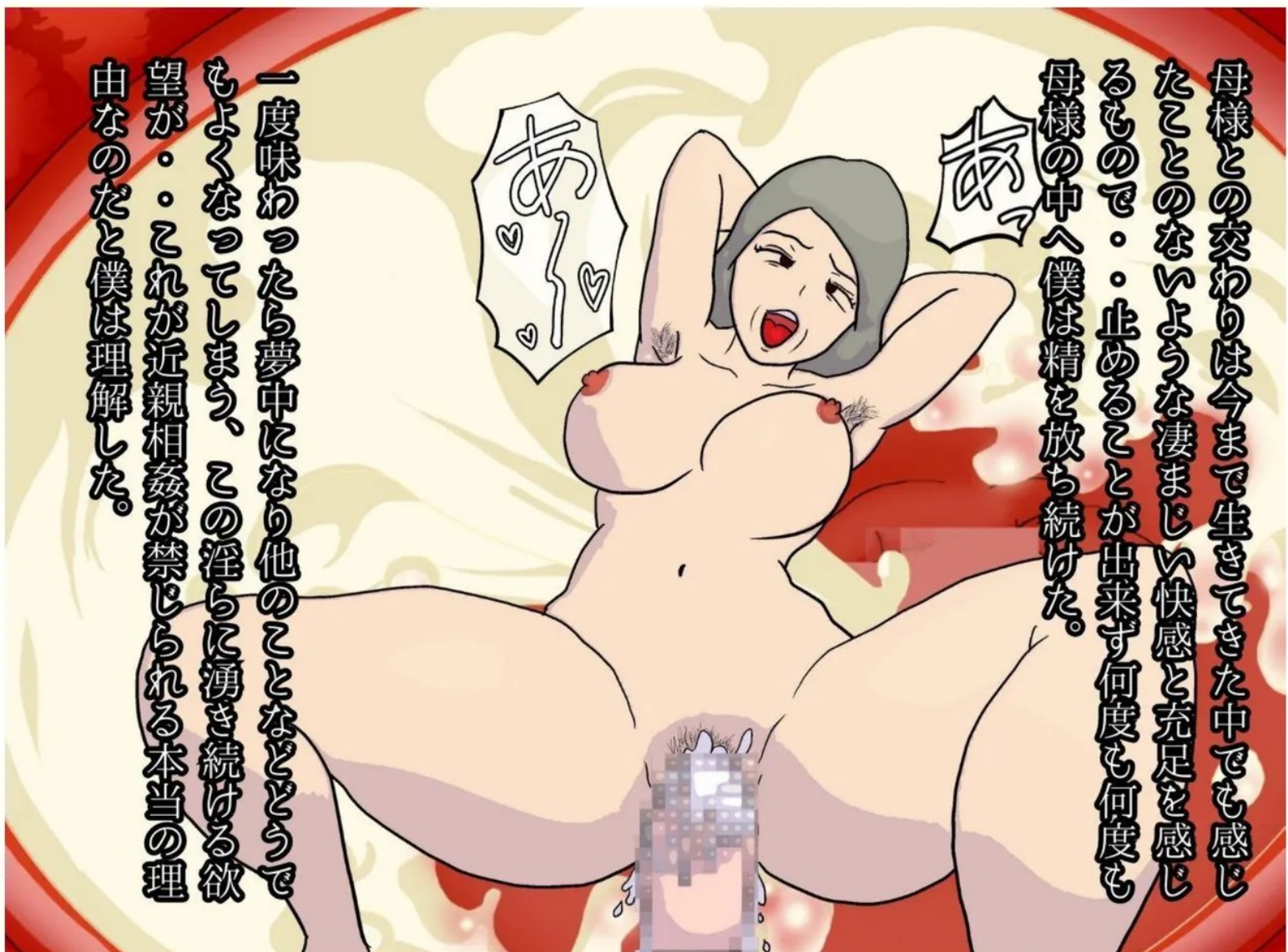
僕は僕を産んだ実の母親のなかへ迷わず挿入って一つに繋がり・・・耐え難い快楽と背徳の興奮のままに、母様のお腹へ精液を吐き出した。

母様との交わりは今まで生きてきた中でも感じ
たことのないような凄まじい快感と充足を感じ
るもので・・・止めることが出来ず何度も何度も
母様の中へ僕は精を放ち続けた。

あ

あ

一度味わったら夢中になり他のことなどどうでも
よくなってしまう、この淫らに湧き続ける欲
望が・・・これが近親相姦が禁じられる本当の理
由なのだ。僕は理解した。



母様っ、僕たちが幸せになるには・・・こうする他無いんだねっ！


もっとな、もっとな出してえ
私の奥にっ母の子宮にい
必ず孕ませるのですっ

己の中の母様への欲望と、母様が抱えていた自由への渴望と・・・お互いの心を確かめ合った僕たちは全てを忘れるように、毎日昼夜を問わず親子で身体を重ねて愛し合った。



それから二年半の月日が流れた。
引き留める者も見送る者もなく、僕と母様は自
由を手に入れてここを出た。
僕たちを引き留める理由が教団にはもう無くな
ったのだから・・・当然だ。



A hand is shown holding a small, light-colored object, possibly a piece of fabric or a small toy. The hand is rendered in a simple, stylized manner with black outlines and light skin tones. The background is a vibrant red with dark, wavy, marbled patterns that create a sense of depth and movement. The overall composition is centered, with the hand and object being the focal point.

ここを出ても、帰るところなんて無い。
父のところへも戻れない。
僕たちは自由を得るために決して破ってはなら
ない禁忌を犯し、捨ててはならないものを捨て
てしまったんだ。

行く当ても目的も無いけれど唯一確信している
ことは、二度と母様を離さないことだ。
いや、もう親子でありながら身体を重ねて愛し
合う背徳の悦びを僕たちは忘れることなんて出
来ないからだ。

僕たちが居なくなつたあの教団はこれからどう
なつていくんだらうか。
もう答えの分かつているはずの想いが僕によぎ
つた。



きっと何も変わることはない。
いや、今まで以上に熱を帯びた熱狂的な集団に
なるかもしれない。
神の血を色濃く受けた新しい教祖の元で……